

明治三十七年二月廿四日 時事新報

タイムス日露

戦争批評 (三十八)

タイムスの軍事記者が其五月十日の紙上に論じたる所左の如し

鴨緑江の戦

陸上第一回の大戦は之より確固たる推論を作り得るの便あるを以て常に深く之に講究を加ふるの價值あるものなりとす我等は今五月一日の戦に關して双方よりの公報を有するに共に又去る金曜日(六日)の本紙に發表したる東京通信員よりの興味ある電報を有す此等の諸報を綜合して我等は明白に戦争の順序を察するを得た事實の上に其根據を有する結論を作るを得べし

ヨシユチエンコー將軍の率ゐるロシア兵は三月二十八日定州に日本騎兵を襲撃して其効を奏せし後遂に義州を撤去して鴨緑江に退却し又再び韓國境上に進軍せんとする日本兵を抗拒するを謀らざる然れども同江の満洲岸には開戦前より既に監視隊なるものあり其後露國兵數の逐次増加するに従ひ此地點に於ける軍隊また加増を得遂に黒水の軍隊に對し生きたる障壁を造るを得るに至れり鴨緑江に於ける露軍は其初め旅團長に依りて指揮されたる

ものゝ如く其後師團長となり更に又第二西比利亞軍團司令官サズリツチ將軍となるに及び露軍兵力の度も亦其指揮官の官階と共に増長したるを疑はず

露國側にありて五月一日の戦に加はりたる兵の實數は歩兵十六箇大隊、野砲四十門、機關砲八門に過ぎざりしと雖もサズリツチ將軍の司令下に屬する他の軍隊別にその近傍に存したるが如し海面よりしたる日本の伴撃は即ちヨシユチエンコーのロシア兵を海岸に牽制したるものならん尙ほ日本側の報告中には東部西比利亞歩兵第二十三聯隊及び第二十七聯隊の隊號あり此等は交戦するものなかりし江の上流にありて其地點を保持し居たるか又は交通線路の守備に當り居たるものなるべし何れにするも戰に加はりたる兵は東部西比利亞歩兵第九、第十、第十一、第十二、第二十二聯隊の各五箇大隊、第二十四聯隊の一箇大隊、野砲兵五箇大隊各砲八門、機關砲兵一箇大隊砲八門、工兵一箇大隊、外に其兵數を詳にせざるロシア兵若千即ち通じて戰闘員二萬たりしを斷ずるを得べし

爾餘の聯隊及びヨシユチエンコーのロシア兵にして若し加りたりとせば黒水將軍が當初の報告に稱したるが如く其兵數三萬を算したるべし三萬と云ふは恐らくサズリツチ將軍の司令下にある兵の實力を稱するものならん軍團組織は南阿非利加の當時の如く開戦の初頭に於て既に全然破壊したるものなるを茲に注意し置くの要あり何となれば右の軍隊は第一軍團及び第三軍團に屬する兵の構成軍團なるを以てなり其第三軍團のみ整備して其兵數また大なり此師團は思ふに第三軍團に屬したるものならん

黒水將軍は京城、鎮南浦より多難の進軍を行ひ遂に江岸に達したる後諸點の通路に於て敵前に現れ其前面を廣闊にして露兵を脅迫したるものゝ如し初期の露國報道に敵の上流遠距離の地に現れたるを告ぐるものあると共に日本海軍は海岸及び河口の諸點に出沒して露國司令官に不安を感ぜしめ以て其注意を上流に専らにするものと能はざらむたり日本軍の運動に關する報告はクロバトキン將軍に達せられたるべく將軍は以て其障壁の既に能く久しきに堪へ敵の軍動をして遷延ならしむるを得たるを感ぜたるべし尙ほ其側面の容易く轉回するべきに見え敵の優勢なるに對する斯の如く暴露したる陣地を頑強に拒守するの體はれな

我等は尙ほ戰局に對するクロバトキン將軍の

意見を聞くも、能はずと、思ふに、將軍は成るべく、日本第一軍の進軍を妨げんとす。希望し三萬の強なる露兵は其自らを保持するに足らざる。江の道路遂に防ぐべからざるに至らば、俄に且つ退却するに足れるを期し、然るべし、摩天嶺に至りて遂に敵を阻止する。然らば、遠河平原に於ける其陣地を破る。棄せざるべからざる。かの決りて定せる將軍は、其副將の此險に達するまで順次その陣地を把持するを得るを豫想したるものなるべし。俄に先づ一週日の間、黒木將軍は其軍隊を義州附近及び同様の東南方に集中せり。其日々露軍の陣地に偵察を試みしめたるは疑を容れず。分遣隊陣地の事は暫く云はす。此露軍陣地は南娘々城、安東縣より北馬溝、榆州溝に亘り最も公平なる地圖に従ふに其距離約二十哩に達せり。此陣地の中心を以て即ち九連城なりとす。江の右岸即ち滿洲面は左岸即ち韓國面を瞰制す。九連城附近に至りて、驛河は其本流に合し、合流してより、驛河幅四千碼乃至七千碼に達し、中流に峒あり、河水即ち三條に分岐す。其中流は小船を通ずべく、左右は徒渉に堪へ、水深腹部に及ぶ。驛河を五月一日頃、於ては徒して渉るべき地點多し。鴨綠江右岸、驛河合流の處に當りて、虎山の高地あり、露國の陣地を瞰制す。此高地北、栗子園に延び、馬溝より、榆州溝に至る露國の左翼を不安ならしむるに堪へたり。九連城陣地に對する虎山は事實に於て、コレンソーに對するラングエーン(南阿戰爭の戰地)なり。露國の陣地は四月三十日夜に至るまで、カッセル、ユタリンスキー將軍により、第三十二聯隊兵の一部に依りて占領されたり。第九、第十の兩聯隊は砲兵三箇大隊を有して、安東附近より、其南方に至るまで、露軍陣地の右翼を保持し、第十一聯隊は豫備たり。砲兵は其初め前面に沿ひて、汎く分附されたるが如し。斯くて四月二十七日より二十八日に至る間に、於て近衛師團は九里驛を占領し、第二師團露兵を驅逐して、中江臺に渡り、兩嶺より、露國陣地の中堅及び左翼に狙撃隊の銃火を注ぎ、前面一帶の注意を之に集中せしめたり。遠く江の下流にありても、亦露軍は二十五、二十六の兩日、艦隊の偵察的攻撃に對する應接に忙殺され、此艦隊は溯流して、安東縣に至り、一時間交戦の後、露軍の砲兵を沈黙せしめたり。斯の如くにして、露軍は其前面一帶に巧なる策劃を要したるものにして、司令官は其來るべき打撃の何れに下るべきやと知るも、能はずしなり。

日曜日(五月一日)の戦に先づ数夜の間に於て、義州西南、江の左岸に砲の據付準備され、巧に露國の陣地を瞰制す。此高地北、栗子園に延び、馬溝より、榆州溝に至る露國の左翼を不安ならしむるに堪へたり。九連城陣地に對する虎山は事實に於て、コレンソーに對するラングエーン(南阿戰爭の戰地)なり。露國の陣地は四月三十日夜に至るまで、カッセル、ユタリンスキー將軍により、第三十二聯隊兵の一部に依りて占領されたり。第九、第十の兩聯隊は砲兵三箇大隊を有して、安東附近より、其南方に至るまで、露軍陣地の右翼を保持し、第十一聯隊は豫備たり。砲兵は其初め前面に沿ひて、汎く分附されたるが如し。斯くて四月二十七日より二十八日に至る間に、於て近衛師團は九里驛を占領し、第二師團露兵を驅逐して、中江臺に渡り、兩嶺より、露國陣地の中堅及び左翼に狙撃隊の銃火を注ぎ、前面一帶の注意を之に集中せしめたり。遠く江の下流にありても、亦露軍は二十五、二十六の兩日、艦隊の偵察的攻撃に對する應接に忙殺され、此艦隊は溯流して、安東縣に至り、一時間交戦の後、露軍の砲兵を沈黙せしめたり。斯の如くにして、露軍は其前面一帶に巧なる策劃を要したるものにして、司令官は其來るべき打撃の何れに下るべきやと知るも、能はずしなり。

隠蔽して、敵に其存在を覺らしむるなく、此地及び嶺上に砲兵の大部隊との陣地を作れり。内に近衛師團及び第二師團の野砲二十四門以上あり別、重砲、ボウイッツナー砲若干門を備ふ。之が口徑に至りては、今に至るも之を豫知するも、能はず。此等の陣地よりして、即ち露軍守備線を中心及び其馬溝に於ける左翼に猛烈なる砲火を注ぐを得べし。露國の報にボチーサンチーとあるは、此馬溝に相當するが如し。 千石所論矣。

タイムス日露戦争批評 (三十九)

鴨綠江の戦 (下)

四月廿九日第十二師團は水口鎮に架橋を初め、三十日朝に至りて之を完成し、僅に二十七名の死傷者を出したるのみにして、同日その渡河を行へり。義州附近に隠蔽されありたる砲兵大隊は三十日午前十時に至り、其放火を初め、午後五時に至るまで九連城に於ける露軍の陣地を砲撃せり。此砲撃は爲めに露軍を牽制し之をして第十二師團の危險なる行動に妨害を加ふるも、能はずしめたり。水口鎮より驛河に向き第十二師團の進軍はカッセル、ユタリンスキー將軍をして其第三十二聯隊を率ゐる江の右岸に退却せしむるに至れり。近衛師團また他の地點に架橋し、渡河して虎山に達すると共に、海軍艦隊は下流にありて露軍を牽制せり。第二師團は近衛師團に續いて進軍したりと雖も、嶺内には強大なる枝隊を存置し、置きたりしが、如し斯の如くにして、黒木將軍は三箇師團の大部分を土曜日の夜中に於て敵の左翼に對する好打撃距離に配置し、大優勢なる砲兵をして其放火を準備せしむるを得たり。

カッセル、ユタリンスキー將軍は形勢に對して、全く正確なる見を持し得たるが如し。其具申し若くは進言したる所果して如何なりしや、其形式に至りては之を知ると能はずと雖も、其長官は戰はんことを欲して、將軍に其陣地を防守すべき旨直接の命令を發したるものなるも、明なり。是に於て、第三師團にありては、他くまで決行して、其能ふべきを盡くすの外なきに至れり。

日本兵は日曜日の早朝に於て其活動を初め、第十二師團は同師團の砲及び戦列砲隊の側射に掩護せられて、午前五時既に四哩の間に展開し、以て驛河の徒渉地に猛進せり。露軍にありては、第十二聯隊の三箇大隊徒渉地點を防守し、第十二聯隊は後方の丘陵に控へ、砲兵第六旅團の第二、第三兩大隊及び若干の機關砲また第十二聯隊を援護せり。思ふに、良好なる徒渉地に就きて渡河するが爲め、日本兵は其展開を縮收するの必要ありたるものならん。一時縱隊を成つて敵に對し、爲めに甚しき損害を受けたり。然るに、關せず、露軍に迫り、其間に於て、其右翼端は露軍第三十二聯隊の左翼大隊を潰破し、カッセル、ユタリンスキー將軍の側面に轉回せり。斯の如くにして、日本の第十二師團の損害

に屈せず、胸部に達する水を渡りて、驛河を越え、斯の陣地に集合し、防禦軍の放火に其抵抗を開始せり。カッセル、ユタリンスキー將軍は第一聯隊の二箇大隊及び砲兵第三旅團の第三大隊を援兵として送られたるは、正午頃にして、方に七時間の苦戦を経たる後なりし。此陣地を救はんとするには、時機既に逸せり。然れども、安東の南部に存する第九、第十兩聯隊の之に合するに至るまで、其陣地を防守するを以て切要なりとす。第十一聯隊は、カッセル、ユタリンスキー中佐の砲兵は其戰友を助けんが爲め、犧牲となりて見事に其第二陣地を防守し、第十二聯隊及び第十二聯隊は之に掩護せられて、其退却を行ふを得たり。

之より先き、近衛師團は第十二師團の左方に於て、驛河し、二師團相聯合して、右の犠牲となりたる聯隊を援けり。砲兵を包擁せり。第十一聯隊の損害を蒙りたるは、即ち此時の事なり。然るも、此好軍隊は數字上敵すべからざる。其敵に對して、午後三時に垂んとするまで、能く防戦し、第十聯隊の第一大隊右翼より、急行して之を援くるに至り、初めて其退却を行へり。三箇の野砲大隊及び機關砲隊また善く戦ふ其馬匹の多數を斃死せしめたるが爲めにして、其砲及び機關砲を失ひたるは、決して汚辱にあらず。